テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご了承いただきますようお願いいたします。

FF14　備忘ログ(PATCH2.0)　メインクエスト編

共通メインクエスト　その9

嵐を超える突破口　～　暴虐の嵐神ガルーダ

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

嵐を越える突破口

シド ： ……◆◆◆か。この船をみていると、何だか落ち着かなくてな。
やはり俺は、この船……。「エンタープライズ」を知っているようだ。

アルフィノ ： フフ、当然だろう。作ったのはほかでもない、あなたなのだから。
精霊評議会から、正式な停留許可証をいただいてきた。しばらくは、ここに停めておける。
……もっとも、我々には、悠長にしている時間もないがね。
ここまで飛んできた様子を見るに、話に聞いていたほどの性能は出ていないようだ。やはり、内部機構が損傷しているのだろう。

シド ： ……ああ。この船は、たぶん本当の姿ではない。

アルフィノ ： 蛮神「ガルーダ」の居城は嵐の中。エンタープライズの真の性能が発揮されなければ、たどり着くことはできないぞ。

シド ： そうだな……。基本的な修理や改修は、部品さえあれば何とかなるだろう。
……しかし問題は、その嵐だ。どれほどの規模のものかは解らないが、いずれにせよ、立ち塞がる風壁をどう突破するか……。

アルフィノ ： 風壁……風の力……。何らかの方法で、打ち消すことができればいいのだが……。

シド ： 打ち消す……。そうか、その手があった。
俺にアイディアがある。「偏属性クリスタル」を使うんだ。

アルフィノ ： なるほど、属性の変換か！　……さすがは伝説の機工師といったところだな。
各地にある「偏属性クリスタル」を知っているだろうか。5年前の第七霊災のおり、大地から噴出したエーテルが結晶化したものだ。
霊災の影響で属性の力に偏りが生じてしまったため、エーテライトのような水色ではなく、
夕焼けのような、橙色となってしまっているがね。
これらの「偏属性クリスタル」には、エーテルの属性を、別の属性に変換してしまう作用があるのだ。

シド ： もし「風属性を火属性に変換する偏属性クリスタル」を発見できれば、ガルーダの風壁の力を弱めるだけでなく、
青燐機関の燃焼力を高めることもできるだろう。
俺の見立てでは、この船の本来の性能に加え、「偏属性クリスタル」を用いた属性変換機構を組み込めば、
どんな嵐だって突破できるはずだ……。

アルフィノ ： だとすれば話は早い。さっそく「偏属性クリスタル」を探そう。……とはいえ、どこから当たったものか。

シド ： 東ザナラーンの「キャンプ・ドライボーン」に、「ランベルタン」というエーテル学者が居る。
聖アダマ・ランダマ教会で何度か話したことがあってな。「偏属性クリスタル」の知識も、そこで得たものだ。
彼なら、何か教えてくれるかもしれない。

アルフィノ ： ◆◆◆。さっそく向かってくれるだろうか。私とシドは、その間に船の修理を進めておこう。

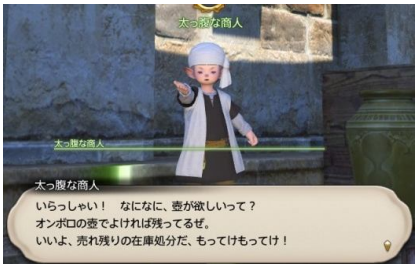
ランベルタン ： はァン、私はエーテル学者のランベルタン。「偏属性クリスタル」について聞きたいって？
いいよいいよ～、教えてあげるから何でも言ってごらん。

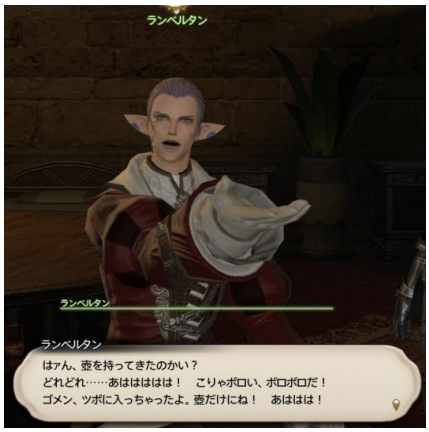
ランベルタンの壺

ランベルタン ： はァん、それにしても「偏属性クリスタル」の話が話題にのぼるとは珍しいねぇ。この土地に来て、この話をする相手は君が2人目だよ。
ひとり目は、聖アダマ・ランダマ教会にいた、マルケズ君だったかな？　エオルゼアではみないタイプの、神秘的な男だったねぇ。
……ふゥん、偏属性クリスタルを探してるのねぇ。名前が表すとおり、これは不安定なクリスタルなんだ。
エーテルの干渉を受けると性質が変わることもある。
性質が変化しないように「容器」が必要だねぇ。それも、エーテル伝導率が低い「絶霊体」という特殊な素材でできたものが。
まずは、適当な壺を用意しようかねぇ。それに錬金薬を塗布して、偏属性クリスタルを収納できる容器にしようじゃないか。
はァん……そうだ。「ゴールドバザー」に行くといいよ。たしか手ごろな壺を売っていた商人がいたはずだ。

太っ腹な商人 ： いらっしゃい！　なになに、壺が欲しいって？オンボロの壺でよければ残ってるぜ。
いいよ、売れ残りの在庫処分だ、もってけもってけ！

ランベルタン ： そそり立つクリスタル群、ほとばしるエーテル地脈。はァん……この地はまさに天国だね。まったくほれぼれするよ。ふゥ～。
はァん、壺を持ってきたのかい？　どれどれ……あはははははは！　こりゃボロい、ボロボロだ！
ゴメン、ツボに入っちゃったよ。壺だけにね！　あはははは！





ハイブリッジの一番弟子

ランベルタン ： 君の持ってきたオンボロの壺に錬金薬を塗布して、偏属性クリスタルを入れるための「絶霊体の壺」を作ってあげよう。ふゥ～。
……ペタペタ……ヌリヌリ……っと。よし、ほらできた！　私の薄色の頭脳にかかれば、簡単だったね。ふゥ～。
ここからほど近い「ハイブリッジ」というところに、「ハハサコ」君という、僕の優秀な弟子がいるんだ。
彼にこの壺を渡して、「偏属性クリスタル」の採り方を聞いてみてくれるかい？
優秀な人材には、優秀な弟子が集うんだねぇ。ふゥ～。

ハハサコ ： おうおうおう！　こちとら、こう見えても学者なんでい！　研究の邪魔だぜ、どいたどいたッ！
おおッ、この壺は……ランベルタン先生の仕上げか！　もしやてめえ、先生から壺を盗みやがったのか！？　……あれ、違うのかい？
…なるほど、偏属性クリスタルを探してるってか！　で、一番弟子の俺に白羽の矢が立ったってワケだな？
う～ん、先生も分かってらっしゃるぜ！

バーニングウォールを踏破せよ

ハハサコ ： エーテル研究の泰斗……ランベルタン先生の門下生の中でも最高位の高弟、通称「零組」の一員！
「研究室の暴れん坊」ハハサコったぁ俺のことよッ！！
それにしても、いい頃合いに来たじゃぁねえか。ちょうど俺も自分の研究を進めるために、
「偏属性クリスタル」を採石してぇと思ってたんだ。
こっから東に広がるバーニングウォールは、第七霊災ん時の「メテオ」の落下地点に近ぇからな。
地表に噴出した偏属性クリスタルがザックザクってぇわけよ。
だが、おめぇが欲しがってんのは純度の高ぇクリスタルだ。バーニングウォール中央部に近ぇところでなけりゃ、拝むことぁできねぇ。
この「採石用モール」を持っていきな。きっと良い塩梅に採石できるだろうぜ。……おっと「絶霊体の壺」も返さなきゃな。
バーニングウォールへ行くにぁ、「バーガンディ滝」の洞窟を通ってけばいい。そんじゃ、ひとつ気ぃつけて行ってきな！

ハハサコ ： おう、どうだった？　欲しがってたやつぁ、手に入ったかい？
おおっ、こいつぁなかなかの上物じゃねぇか！　さっそく、ランベルタン先生に見せてこいよ！
……さてと、俺も早く研究成果をまとめなけりゃぁな。

ランベルタン ： はァン……「偏属性クリスタル」を持ってきたのかい？　どれどれ、見せて見せて！　早く早く！
……ふぅぅむ、このクリスタルは、「土属性を火属性に変換するクリスタル」だねぇ。
君が欲しいのは「風属性を火属性に換えるクリスタル」……。
これじゃ駄目だね～ざんね～ん！　ン、まてよ？　……このクリスタルを使えば……つまり「土を火に換える」ワケだからして……。
……ならば「風を土に換える」クリスタルがあれば、万事解決するってことなんじゃないかな？　……はァン、私ってやっぱり天才？
…おや、話についてきてないの？ごめんごめん、ちょっとレヴェルが高かったかな？
私の薄色の頭脳が活性化しすぎてしまった。ふぅ～。
簡単に言うとね、手元に「土から火」があるなら、「風から土」のクリスタルをみつければ、
2つを組み合わせて「風から火」にできるじゃないか！
実は、さっき委員会から連絡があってねぇ。君が偏属性クリスタルを持ち帰ったのなら、
グリダニアまで送るようにって言われているんだよね。
はァン、さすがの私も研究資金を出してくださってる、バルデシオン委員会には頭が上がらないわぁ。ふぅ～。
というわけで、このクリスタルはグリダニアへ送っておくね。
ん～、君のクリスタルを探す旅はこれからもまだまだ続くのだね。いいねぇ、なんだかとっても幻想的だねぇ～。ふぅ～。

偏属性クリスタルを求めて

ランベルタン ： はァン、次のクリスタルを探しにいこうか。ほかに「偏属性クリスタル」のある場所はっ……と。
東ラノシアにあったような気がするな。
あ、いや、あそこは駄目だね、駄目。帝国軍の皆さんがいるんだったよ。ふぅ～。危うく君を死地に送りこむとこだった。あはははは！
う～ん……ほかの場所というと……そうだ、西ラノシアの「幻影諸島」なんかどうだい？
あそこの「シリウス大灯台」のクリスタルはオススメだ。
たしか……島の近くにある「エールポート」にも私の優秀なる弟子の1人がいた気がするよ。
「シアーナ」君といったかな？　彼女に話を聞くといい。
「絶霊体の壺」を忘れないようにね。いいなァ、ちょっとしたバカンス気分ってやつだね。
私は潮の匂いが大嫌いだけどね。ふぅ～。

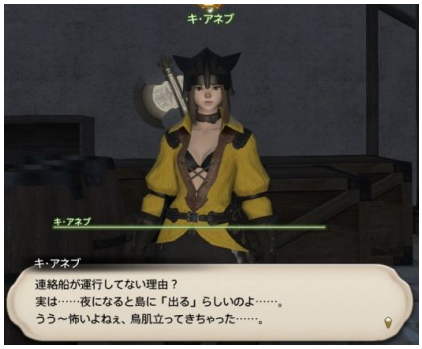
シアーナ ： はーい！　君だーれ？　あれー、もしかして遊び相手を探してるのー！？　ざーんねん、私は仕事でこの街にきてるのでーす。
あら、これ、先生の壺じゃない？　私が「零組」の一員だと知って、わざわざ来たの？　ありがとー！　私、シアーナっていいます！
「零組」っていうのは、エーテル学の権威、ランベルタン先生の3人の高弟を指す言葉なの。
あ、ちなみに私がブッチギリの一番弟子だかんね！
というわけで、私は研究のためエールポートに来てるの！　でも、ちょっとだけ開放的な気分になってまーす！
あーん、水着持ってくればよかったなー！

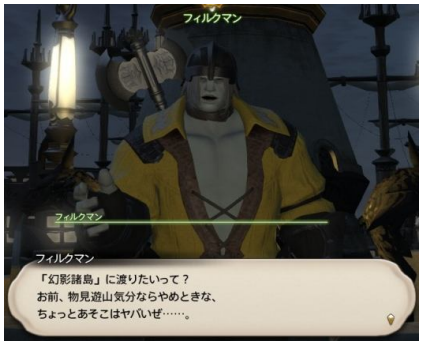
船はいまだ港に

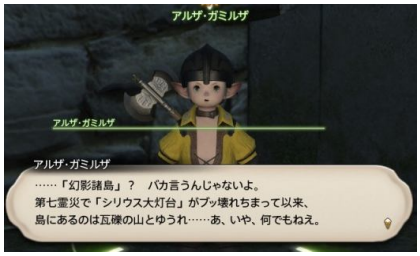
シアーナ ： へー！　「幻影諸島のシリウス大灯台」へ「偏属性クリスタル」を採りに来たの！？
幻影諸島なら、このエールポートの沖合にあるわよ。
でも今は、渡航制限がかかっていて、島に行く連絡船は運行してないんだってー。私も仕事で用事があるのにー、へこむわー。
ちょっと君、悪いんだけどさ。街のイエロージャケットの人たちをあたって、渡航制限の理由を聞いてきてくれない？　ヨロシクー！

キ・アネブ ： 連絡船が運行してない理由？　実は……夜になると島に「出る」らしいのよ……。
ううー怖いよねぇ、鳥肌立ってきちゃった……。

フィルクマン ： 「幻影諸島」に渡りたいって？　お前、物見遊山気分ならやめときな、ちょっとあそこはヤバいぜ……。







アルザ・ガミルザ ： ……「幻影諸島」？　バカ言うんじゃないよ。第七霊災で「シリウス大灯台」がブッ壊れちまって以来、
島にあるのは瓦礫の山とゆうれ……あ、いや、何でもねえ。

シアーナ ： 情報収集ごくろうさまー！　ねね、みんなの話はどうだった？
えー？　「出る」って……何が？　もしかして……ゆ、幽霊……？　うわーやめてよー！　私そういうの苦手なのよー！

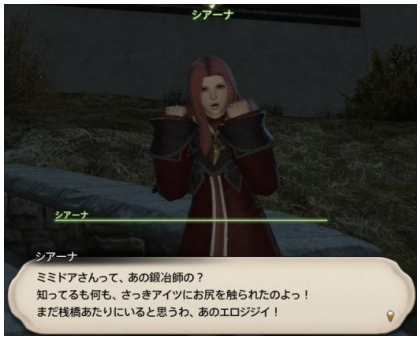
幻影諸島奇談

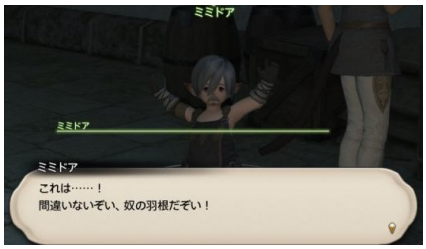
シアーナ ： 幻影諸島の幽霊……うう、まさかの展開！　と、とにかく渡航制限がかかってるくらいだから、ただの噂話ってワケでもなさそうね……。
実は君が聞き込みしている間、私も町をブラブラしながらそれとなーく調べてみたんだけど……。
「シリウス大灯台」に勤めていた、灯台守の「スキフリン」さんって人が、この街にいるらしいの。
幽霊のことも、何か知ってるかもしれないわ……。お願い、話を聞いてきてー！　私、ほんとに苦手なのよー！

スキフリン ： 歌が、聞こえるんだ……。ラ、ラララ……ララ、ラ……歌う、歌……うたが……。
耳から、離れなくて……ララ……耳が、はな、れ……。
これを、頼みが……「ミミドア」さんに渡して……。キラキラ……キラキラ、きれいな、羽根……。
……美しい、歌声……あの方の……。スキフリン：……。……。
……助けてくれ、ミミドアさん……。
ラ、ラララ……ララ、ラ……。キラキラ……キラキラ……。

シアーナ ： スキフリンさん、どうだった？　……何を言ってるか意味不明だったの？　何それ、怖ーっ！
え、「ミミドア」って人へお使いを頼まれた？
ミミドアさんって、あの鍛冶師の　？知ってるも何も、さっきアイツにお尻を触られたのよっ！
まだ桟橋あたりにいると思うわ、あのエロジジイ！

ミミドア ： ……わしが鍛冶師のミミドアじゃが？　むう、もうちょいと大きな声で喋ってほしいぞい。わしは耳が悪いでな。
これは……！　間違いないぞい、奴の羽根だぞい！
……わしは破壊された「シリウス大灯台」の修復のため、リムサ・ロミンサから派遣された技師じゃぞい。
それが例の幽霊騒ぎで、ほかの技師が逃げ帰ってしもうて、困っちゅったところじゃ。
……まさか、おはんもあの島へ渡りたいのか？
……だったら「幻影諸島」に渡るための、技師向けの「特別渡航許可証」をあげようかね。
そのかわり、わしに力を貸してほしいぞい！！
実は、幻影諸島では、ある異変が起きているんじゃぞい。それも、わしの手には余る問題……
そこで冒険者のおはんに、この件を解決してほしいぞい！
まずは、島へ向かって、状況を見てくれんかの？　わしも後で必ず駆けつけるぞい。





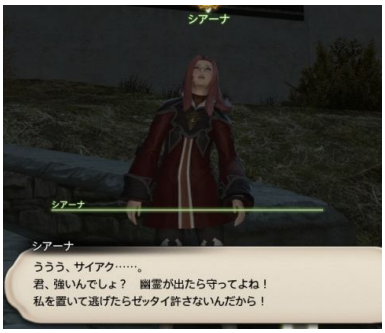
ミミドア ： むむむ、やはり今度こそ、奴の仕業に違いないぞい。こいつは由々しき事態だぞい！

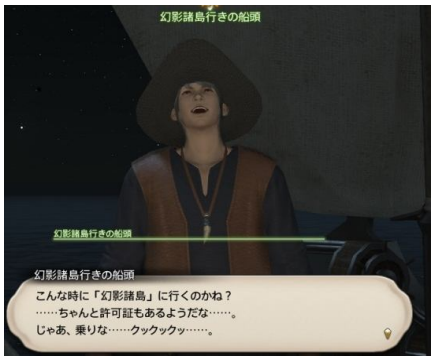
シアーナ ： おそーい！　何してたの？もう、待ちくたびれちゃったよー。
おやおや？　「特別渡航許可証」じゃん！　やったね、これで幻影諸島に行けるよー！　じゃ、気をつけて、いってらっしゃいー！
……えー？　わ、私も一緒に行くの？　あ、あははは、う、嘘でしょ？　いやーっ！　幽霊こわいーっ！

島に乗りこめ！

シアーナ ： ううう、サイアク……。君、強いんでしょ？　幽霊が出たら守ってよね！　私を置いて逃げたらゼッタイ許さないんだから！
じゃあ「幻影諸島」行きの船着場に行くよ……。ううう、怖い……さ、先行ってて。お手洗い行ってから追いかけるから……。

幻影諸島行きの船頭 ： こんな時に「幻影諸島」に行くのかね？　……ちゃんと許可証もあるようだな……。
じゃあ、乗りな……クックックッ……。





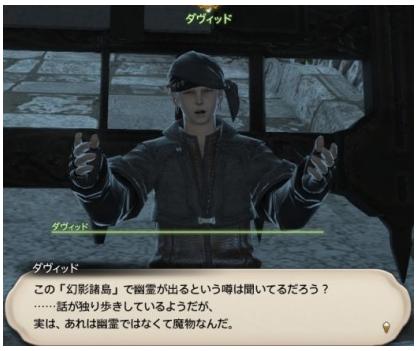
シアーナ ： はー、着いた着いた。……どうやら、見た感じは普通みたいね。
わ、わわわ悪いんだけど、ここから先はひとりで行ってくれない？　あ、足が震えて……う、動けないの……。
あ、これ預かっていた「絶霊体の壺」ね。灯台守さんに渡せばいいから。じゃ、クリスタル回収、よろしくーっ！

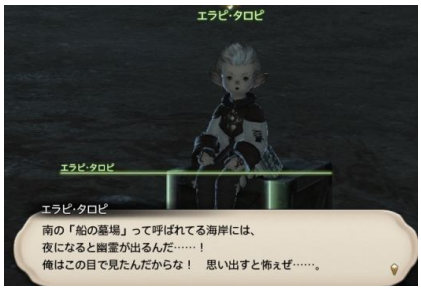
ダヴィッド ： 君は……冒険者か？　まったく、関係者以外、禁止だと言っているのに、無断で渡航してきたのかい？
おや、この壺は？　……フム、なるほど。大灯台の偏属性クリスタルを採集しにきたのだね？　だが……それは厳しいかもしれんな。

波間よりいずる者

ダヴィッド ： 現在、この「シリウス大灯台」は閉鎖中なんだ。霊災前は地脈から噴き出すエーテルを使って発光させる、
当時、最新鋭の灯台だったんだけど……。
第七霊災のとき、火の玉が直撃してな。その衝撃でエーテルが不安定な形で固まっちまった。
内部は崩壊の危険もあるから、立ち入り禁止になってるんだ。
どうしても偏属性クリスタルが欲しいなら、俺が採ってきてやってもいいけど……。その前に、俺の頼みを聞いてくれないか？
この「幻影諸島」で幽霊が出るという噂は聞いてるだろう？　……話が独り歩きしているようだが、
実は、あれは幽霊ではなくて魔物なんだ。
……夜になると浜辺から得体の知れない魔物が現れ、あちこちを徘徊するのさ……。幽霊が出るって噂が広まっても仕方ない状況だよ。
おかげで、技師たちが寄りつかず、一向に修理が進まないんだ。幸い、このバカでかい偏属性クリスタルの輝きが、
灯台の役目を果たしているけどね。
冒険者の君に、この魔物の調査をしてもらいたいんだ。……冒険者から目撃情報を得られるかもしれない。
まずは彼らの話を聞いてみてくれ。

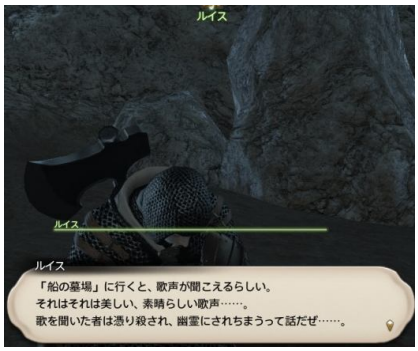
エラピ・タロピ ： 南の「船の墓場」って呼ばれてる海岸には、夜になると幽霊が出るんだ……！
俺はこの目で見たんだからな！　思い出すと怖ぇぜ……。





ルイス ： 「船の墓場」に行くと、歌声が聞こえるらしい。それはそれは美しい、素晴らしい歌声……。
歌を聞いた者は憑り殺され、幽霊にされちまうって話だぜ……。

アルドウヴィル ： 霊災以降に潮の流れが変わったらしく、島に難破船が漂着するようになった。
そしてついた地名が「船の墓場」……薄気味悪いぜ。

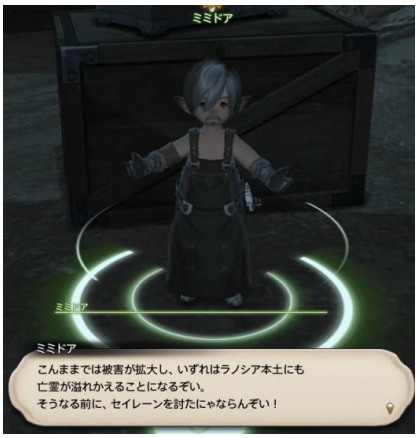


ダヴィッド ： 「船の墓場」で聞こえる歌声……？　では、この島に魔物が溢れているのは、その「歌声」が元凶だっていうのか……？

狂気の歌声

ダヴィッド ： ううむ……。「歌声」はいったいどこから……ああ、君か。君が調査してくれた歌声のことが頭から離れなくてね。
そうだ、ついさっきエールポートから、名匠の「ミミドア」さんが、到着したと連絡がきたんだ。
ミミドアさんは、灯台の修復に派遣された技師だ。幽霊騒ぎで、復興計画が大幅に遅れているからな。
関係者はやきもきしているだろう。
幽霊騒ぎも気がかりだけど、復興も進めないといけないからね……。すまないが、ミミドアさんの出迎えに行ってくれないか。

ミミドア ： おう、◇◇◇どんか。……それで、島の様子はどうなっとるね？
……魔物が溢れて灯台修復どころではなかか。思うたとおり……やはりそうじゃったか。
「謎の歌声で巷に亡霊があふれかえる……」……実は以前、これと似たような事件に出くわしたことがあったのじゃぞい。
……美しか歌声で船乗りを惑わせ、船を暗礁に導いて沈没させる……。伝説の魔物「セイレーン」の仕業に違いないぞい！
セイレーンの歌声は聴く者を虜にして精気を吸い取り、その意のままに動く、生きた屍にするという話だぞい。
今回の魔物たちも……海で死んだ船乗りや、海賊たちの亡霊だと思うぞい。
こんままでは被害が拡大し、いずれはラノシア本土にも亡霊が溢れかえることになるぞい。
そうなる前に、セイレーンを討たにゃならんぞい！
……おう、大事なモンを忘れていたぞい。これは「ミミドア式耳栓」じゃぞい。
これがなければ、奴の歌声の虜になってしまうぞい！
奴は「船の墓場」に現れるはず……。そこに張りこんで、セイレーンを退治するぞい！
そんじゃ、わしはちっと先に行っとるぞい！！



ミミドア ： 浜辺に焚き火を用意しといたからの。あそこでちくっと待って、様子を見るぞい。
運が良ければ、セイレーンに会えるはずじゃぞい！

ミミドア ： ここに現れるというのは、やっぱり、ただの噂だったのかのう……。
……ん？　なんじゃ、この歌は……。
……ほ、ほんとに出おったぞい！　あ、あれが、伝説の魔物「セイレーン」じゃ！！
あの時の事件と同じならば、奴は海上から動かず、下僕の亡霊たちをけしかけてくるはずじゃ……。……あとのことは任せたぞい！

セイレーン ： ♪また　哀れな罪人が迷い込んだ　私を求めて……　いいわ　貴方の愛に寄り添ってあげる　私の歌で永遠に
♪可哀想に貴方には　私の愛が届かないだなんて　　いいわ　ならば罪人のまま亡者と踊れ　私の歌で延々と
♪愛は亡者となりて朽ち果てず　とこしえに朽ち果てず　愛を求め　私を求め　踊り続ける運命の中で……
♪哀れな罪人を駆り立てるは　憎悪か絶望か　　踊り続ける宿命の中で　罪人の想いは消えていく……
♪愛の歌声は潮風に乗り　亡者とともに届けられる　私を愛しすぎた　罪深き貴方のもとへ……
♪恋に落ちて　愛に溺れ　哀れな罪人となった……　貴方の体は血を流し　貴方の心は血を啜る
♪愛しすぎた私は　愛の歌を強く奏でる　哀しすぎた貴方を　最期に……
♪時は終焉を告げ　亡者の舞踏会も幕が下りる……　　いつかまた逢いましょう　愛の輪廻の輪の中で……

ミミドア ： あっぱれだったぞい、◇◇◇どん！　しかし……奴に逃げられてしもうたことは残念だのう。
……わしの悲願は、憎きセイレーンを討滅することなのよ。かつて奴の歌声を聴き、海に還ってしもうた
鍛冶師ギルドの者らの仇を討つまで、わしは絶対に諦めん。
さてと、それじゃあ、ここらでさらばじゃぞい。どこかで会ったときには、また力を貸してほしいぞい！

ダヴィッド ： なんと……セイレーンだと！？　あの伝説の魔物が黒幕だったか……。
逃げられたのは惜しいけど……。島から去ったのなら、幽霊騒ぎも少しは落ち着けばよいが。
ともかく、大灯台の修復には、じきに取りかかれるだろう。
礼というわけではないけど、これは約束の品。大灯台で採れた「偏属性クリスタル」の欠片だよ。
ちゃんと壺に入れておいたからな！　ありがとよ！

シアーナ ： おかえりー！　どうだった、どうだった？　……幽霊は怖くなかった？
おおっ！　「偏属性クリスタル」じゃん！でかしたーっ！
あ、でも……これって、「風属性を水属性に変換するクリスタル」じゃん？　う～ん、君が欲しいのじゃなかったねー。
でも、あと「水を土に換えるクリスタル」があれば、目的達成ってわけじゃないっ！？　あとひとつ！　がんばれーっ！
そうだ、さっきランベルタン先生から連絡があって、このクリスタルは壺ごと、グリダニア・ランディングまで
送っておくようにと言われたよ！　任せといてー！

最後の偏属性クリスタル

シアーナ ： さってと！　がんばった君に、良いニュースと悪いニュースがあるよ？
どどーん！　良いニュースねー　！君の探す偏属性クリスタルの発見情報だーっ！
私たち「零組」の頼もしき仲間から、ついさっきモグレターで受け取った情報だよ！　ピッチピチだよっ！
ででーん！　悪いニュース……。それは、ここで私と君がお別れってことかな？　楽しかったから残念だよー。
仲間の「ヘディン」は「グリダニア」にいるの！　いってらっしゃい！　また会おうねー！

ヘディン ： あっハイ、僕が「零組」のヘディンです……。どど、どうも……ハイ。
せ、先生から……「水属性を土属性に変換する偏属性クリスタル」を、お探しになっていると聞きました……ハイ。
僕の計算によると、大食いスプリガン「ゴギー」が、その偏属性クリスタルを持っているはずです……ハイ。
霊災時、巨大な偏属性クリスタルが、白狼門の先「枯骨の森」に発生したのです、ハイ。
ただ、ゴギーがほとんど食べてしまったようです、ハイ。
偏属性クリスタルの残りも、ゴギーが抱えています。で、でも、クリスタルを食べて精がついたようで、
素早く凶暴、誰にも捕まえられませんです、ハイ……。
ゴギーは、弱いスプリガンたちを迫害しているらしく、「スプリガンの巣窟」を追い出されたスプリガンたちは、
ほうぼうで、はぐれスプリガンになっているとか……。
「シルフの仮宿」に、はぐれスプリガンの目撃談があります。そいつがゴギーの弱点を知っているかもしれませんです……。
シルフ族の「コムシオ」に聞くと良いと思うです、ハイ。

コムシオ ： アナタ！　また、来てくれたのでふっち！？　……ええ？　「ヘンゾクセイクリスタル」を集めるために、
まいごの黒モジャを探しにきたのでふっち？
たちか～、ひとりぼっちの黒モジャなら、ちょっと前にフラフラと来たでふっち？

はぐれスプリガンの救出

コムシオ ： たぶん、アナタが探ちてる黒モジャなら、中央森林のほうからやってきて、何かを探してウロウロ走りまわってたでふっち。
この仮宿にも来たんだけど、お目当てのものは、なかったみたいでふっちね……。
「ラークスコール」のほうに行っちゃったのでふっち。
……悪い子シルフに、いぢめられたら危ないでふっち。アナタに、助けに行ってほぴいでふっち！

ティギー ： ティギー、ウルシイ！　アロガト、ミジラヌヒト！……ココ、ワリイシルフ、イッパイ……。
ティギー、コワクナイ、シルフノトコ、モドリ……。
ゴギー、ワリイヤツ……。ゴギー、ミンナ、イジメル……。ティギー、ゴギーコワイ……。

コムシオ ： アナタ！　お帰りなのでふっち～！　この黒モジャは、ティギーってお名前らちいでふっち。
ティギーは、悪い子大食い黒モジャの「ゴギー」を、倒ちてくれるヒトを、探してたらぴいのでふっち。
ゴギーは、とってもすばちっこくて、誰も捕まえられないから、倒ちぇないでふっち。
でも「赤心石」っていう、珍ちい鉱石で誘えば、珍し物好きのゴギーはきっと現れる……らちいのでふっち！
わたぴたちは、石には詳しくないでふっち！珍ちい石なら、彫金師ってヒトのほうが詳しいでふっち！
「十二神大聖堂」の近くにお散歩に行ったとき、石をたくさん持ったヒトがいたのでふっち。
きっと彫金師だと思うでふっち。行ってみるのでふっち！

メルウィン ： ……「赤心石」を探しているの？たしかに、滅多にお目にかからない石だけど……あれは実用的な価値はゼロに等しいわよ。
……どうしても見つけたいの？えーと、ちょっと待って、どこかにメモが残っていたはずだわ……。

悪食ゴギーを捕まえろ

メルウィン ： えーっと、赤心石のページは……これね。チャートゴーレムの核である「石兵のソウルストーン」が、この石でできているそうよ。
でも、「鱗紋岩」の輝きで浄化しないと元に戻せないみたい。チャートゴーレムは、ラークスコールの泉付近で、
見つかるらしいから、どうしても欲しいなら行ってみるといいわ。

ティギー ： イシ、ヒカリ、カザス！　イイイシ、デキル、イシシ！
ヤタ！　イイイシ、デキタ！　イイイシ、ウマソウ！！
イイイシ、ティギーノオウチ、オク！　ゴギー、クル、ゼッタイ！
オマエ、ゴギーノクリスタル、ホシイ。ゴギー、ツヨイ、オマエ、モットツヨイ！
オマエ、ゴギー、ヤッツケレ！！

ヘディン ： わわわ！　もう帰ってきたんですか……！？　もしや「偏属性クリスタル」を……？
わ、わわわわ……ハイ！　素晴らしい、本当に手に入れてきたのですね！
う、うわぁ……。……なんかこれ、スプリガンの体液で、ぬっちょぬちょじゃないですか……。
あ、でもこれが「絶霊体」のかわりになって、エーテルの干渉から偏属性クリスタルを保護していたようですね。
……どれどれ。やりましたです、ハイ！　これはまさに「水属性を土属性に換えるクリスタル」です！
僕たち「零組」の後学のため、少しばかり分けて……。い、いえいえ、冗談ですよ……ハイ。

始動！エンタープライズ

ヘディン ： ……お、おっと失礼しました。偏属性クリスタルをお返しいたします、ハイ。
先生から話は伺っております、ハイ。せ、先生がお世話になったというマルケズさんなら、
グリダニア・ランディングにいらっしゃいます……。
……あ、貴女みたいな冒険者が、「偏属性クリスタル」を収集するなんて、き、きっと大変な事情があるのでしょう。
……わ、私は研究者。理由は聞きません。零組一同、皆様のご武運を祈っています……ハイ。

アルフィノ ： 雪の白より、森の緑が落ち着くよ……。もっとも、一息ついている場合ではないがね。
向かうべくは、蛮神「ガルーダ」の待つ空だ。さぁ、エンタープライズを蘇らせよう！

シド ： ◆◆◆か。ほかの偏属性クリスタルは、ランベルタンから届いている。残りは、そいつだけだ。
……偏属性クリスタルがそろったな。これで、この船は本当の姿を取り戻し、どんな嵐も突破する力を、手に入れられるだろう。
この仕事は俺にしかできないこと。……そうなんだろ？
やってみせるさ。「エンタープライズ」を蘇らせてみせる。……少し時間をくれ、さっそく属性変換機構を作ろう。
エンタープライズ……。俺が居た……必要とされる俺が……。

暴虐の嵐神ガルーダ

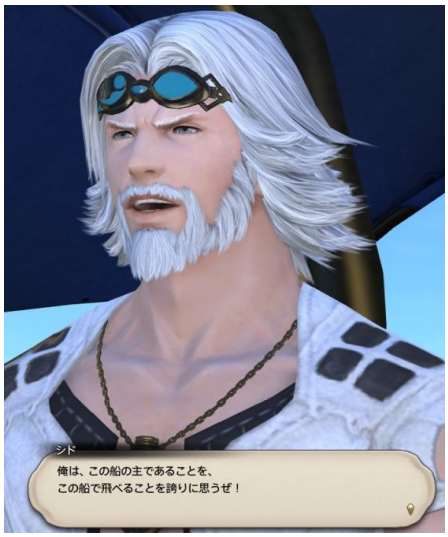
シド ： これで……いいはずだ。お前が集めてくれた偏属性クリスタルを組み合わせ、属性変換機構を作った。
まず、蛮神「ガルーダ」の風壁を、ラノシアのクリスタルで、風から水属性に変換する。
それを、黒衣森のクリスタルで水属性から土属性に変換。最後にザナラーンのクリスタルで、
土属性から火属性に変換……している。
……つまり、3つの「偏属性クリスタル」を直列に繋ぎ、属性を連続で変換させることで、「風属性を火属性に変換」したんだ。
少々大変だったが……あとは、この船に組みこむだけだ。
……やはり、不思議だ。自分では何も思い出せないのに、手がすべてを覚えている。
そして、作業に没頭していると、何故か心が浮き立つんだ。
……さっそく属性変換機構をエンタープライズに組みこむとしよう。この船を本当の姿に蘇らせるために……。

シド ： これで直った……はずだ。

アルフィノ ： これが「エンタープライズ」の本当の姿か！
目指すは、クルザス北方……。蛮神「ガルーダ」の祭壇、「ハウリングアイ石塔群」だ！
エンタープライズ、発進！

シド ： ……ふぅ。
……ッ！？
そうだ……俺は、かつてこの船で……。エンタープライズで……大空を駆けていた。
お前たちのような、勇敢な冒険者を乗せて……。
このイカしたゴーグルは、いつから着けていたんだっけな。
そういえば、ガキの頃は、もっと「坊ちゃん」みてえな格好してたっけ……。
みんなに褒められるのが嬉しかったな。親父に近づけた気がして。
俺は帝国……「ガレマール帝国」で生まれたんだ。
そして、親父の背中を追うように、魔導技術を学び、機工師になった。
いつ頃からだったかな、親父と……。ミド・ナン・ガーロンドと話さなくなったのは。

シド ： そうか……。野郎が「メテオ計劃（けいかく）」にのめり込みはじめてからだ……。
そういや、この頃からか。アイツが俺の後見人を買ってくれたのは。
しかし、結局はアイツも……。ガイウス・ヴァン・バエサルも侵略者に成りはて、失望した俺は帝国から逃げ出した。
そして、エオルゼアに渡り、ガーロンド・アイアンワークスを立ち上げた。
そうだったな、この時からだ。このゴーグルを着けるようになったのは。
俺はエオルゼアで、さまざまな人々、冒険者と出会い、親父を狂わせた「メテオ計劃」と戦った。
俺は証明したかった。技術が、自由のためにあるってことを。
そして、それを認めさせたかった……。救いたかったんだな、俺は、親父を。
このゴーグルは、その決意の証だったじゃないか。
忘れていたぜ。この風を……この空を……。
さっき感じた光……。あれは、お前なんだろ。ありがとよ。
生粋の帝国人……ガレアン族はな、額に「第三の眼」なんてのを持ってんだ。
そのためかね。なんとなくわかるんだよ、感覚的にだけどな。
このエンタープライズは、お前たちのような英雄を、戦場に送るための船だ！
俺は、この船の主であることを、この船で飛べることを誇りに思うぜ！



アルフィノ ： シド……？まさか記憶が！？

シド ： アルフィノ……だったな。面倒をかけちまった。
俺の名は、シド！
ガーロンド・アイアンワークスの代表、シド・ガーロンドだ！
行くぜ！　蛮神「ガルーダ」をぶっ飛ばしによ！
まったく、恥ずかしい話だぜ。今の今まで、お前に気付かなかったなんて。
俺たちは、5年前の戦いをともに駆け抜けた戦友だというのによ。
ほかのヤツらには、お前が生きていたことをしばらく黙ってるつもりだ。
この状況だ、5年前の英雄が生きていたなんて知れりゃ、各国は大混乱。お前も身動きが取れなくなっちまうだろう。
なに、ほかでもない俺が思い出したんだ。それで十分だろ？
お前は特別な存在だ。いつかきっと、みんな思い出すさ。それまで、俺が付いててやる。
見えてきやがった！　準備はいいか！？
へッ……相変わらず、いい返事だぜッ！！　ヒャッハー！！

アルフィノ ： なんとか、風壁は無事に突破できた。目的の蛮神「ガルーダ」は、恐らくこの門の先……いよいよ決戦の時がきたようだ。
ここまでの長きに渡る道程も、すべてはこの一戦のため。さあ……蛮神「ガルーダ」を倒すぞ！

？？？？ ： こしゃくなッ……！　わたくしの「ギガメスの大風壁」を突破しおるとはッ……。
愚かなクソ虫めがッ！　クソ虫にはクソ虫のッ、分限があることも忘れたかッ！！

アルフィノ ： あれが、蛮神「ガルーダ」か！？　……なんという威風なんだ！

シド ： さすがは、最凶の蛮神ってわけか。酷薄な顔をしてやがる……。
◆◆◆。……いや、◇◇◇。あそこを見てみろ。
ヤツら、ほかの蛮族どもを捕らえてやがる。……蛮神「ガルーダ」への生贄のつもりか。

蛮神ガルーダ ： アーッハハハハハハッ！
地を這う虫ケラどもがッ！　ここが、わたくしの城と知って訪うたかッ！？

アルフィノ ： そうだッ！　私たちは貴様を倒すためにきた！

蛮神ガルーダ ： 聞こえたかッ、皆の者ッ！虫ケラめが、なにやらチィチィ言うておるぞッ！
虫ケラは虫ケラらしくッ！　地に這いつくばり、土でも食んでおれば良いのじゃッ！　この大空で輝く、わたくしを崇めてなッ！

シド ： へッ、その虫ケラでもなぁ！　こうやって空を飛び、お前の懐に入ることができたんだ！
そして、このままお前を討つことだってできる！

蛮神ガルーダ ： この空は、わたくしのものよッ！
……虫ケラごときが空を舞うなどとくだらぬ夢を二度とみれぬよう……その臓腑をむしりッ、血祭りにあげてくれようぞッ！

イクサル族の群長 ： 我らがッァ、御神「ガルーダ」様にッィ、仇成す羽根ナシどもめッェ！　討ち取らえよッォ！　聖地よりッィ、生きて返すなッァ！

シド ： イクサル族どもは、俺たちが圧える！　お前は、蛮神「ガルーダ」を倒せ！

アルフィノ ： 蛮神との戦いも、これで最後だ！　行け、◆◆◆！　「暁」のため……エオルゼアのために！

蛮神ガルーダ ： なれば……虚妄にまみれしそのそっ首ッ！　薄紙のごときその羽もッ！　腕もッ！　足もッ！　すべてッ！　むしり取ってくれようぞッ！！

ガルーダ ： はじめようぞ、虫ケラ……わたくしの風でッ！　嵐でッ！　無残に散れッ！
わたくしは空の覇者なるぞッ！この翼から逃れるすべなどないと知れッ！
その首ッ！　その四肢ッ！　引き裂いてくれるッ！
ギィィッ！　憎たらしいクソ虫めッ！望みどおり、なぶってくれるわッ！
お、おのれ……クソ虫がぁぁぁぁぁッ！！！

蛮神ガルーダ ： オオオッ……オオオオオッ……。

シド ： なにィ！？

蛮神ガルーダ ： アーッハハハハハハッ！　無駄じゃッ、無駄なことじゃッ！
愚かなクソ虫めがッ！　その程度で、わたくしが寂滅するとでも思うたかッ！
ここには、我が下僕らによりて、無数のクリスタルが集められておるッ！
「クリスタルの力」はッ……！　すなわち、わたくしの力ッ……！
いくら、わたくしを追い詰めたところでッ！　我が下僕らの祈りは増して強まりッ、
その願いによって、わたくしは更なる力を得るッ！
……もはや、この地に醜き神はおらぬッ！　この地のクリスタルは、すべて、わたくしのものよッ！
わたくしは最強にして至上の神ッ、嵐神ガルーダじゃッ！アーッハハハハハハッ！

アルフィノ ： ……くそッ！　イクサル族どもの祈りを止めさせねば！

シド ： おう！

アルフィノ ： ぐあッ！

蛮神ガルーダ ： アーッハハハハハハッ！そ　うはさせぬぞッ、クソ虫めがッ！
クソ虫の分際でッ、無上の存在であるわたくしにッ！　……そして、我が下僕らに牙を向けた報いはッ！
遺漏なく受けねばならぬのじゃッ！
まずは、グリダニアのクソ虫どもに野嵐をッ！
ウルダハのゲロ虫どもには砂嵐をッ！　そしてッ、リムサ・ロミンサのウジ虫どもには颶嵐をッ！
わたくしの嵐で、エオルゼアすべてを包み込みッ、虫ケラどもを一匹残らず切り裂いてくれようぞッ！
だが、まずは貴様らから……わたくしに直接刃を向けた貴様らからだッ！　その罪は償うには死すら生ぬるいッ！
テンパード（信徒）になるが良いッ！　そして、その生命尽きるまで地を這い続けッ……。わたくしを一向に崇め続けるが良いわッ！
なんじゃとッ！？　何故じゃッ……何故に貴様はテンパードにならぬッ！？
か、体からッ……力が抜けるッ……！？　「クリスタルの力」がッ……抜けていくじゃとッ……！？
なんなのじゃッ……その力はッ……？　何故、クソ虫ごときの前にッ……。わたくしは正しく力を発揮できぬのじゃッ……！？

蛮神ガルーダ ： 何故じゃッ……何故に揺るがぬッ……。何故にひれ伏さぬのじゃッ……！

やったか！

ガイウス ： その程度のものか！
その程度のものか！　蛮神「ガルーダ」よ！
現存する蛮神の中で、最も邪悪で、凶暴と言われるお前の力は、その程度のものなのか！

シド ： ガイウス！？

ガイウス ： 久しいな、シド。父親から逃げ、国から逃げ、わしからも逃げ……。次は何から逃げる気だ？

シド ： なんだと！？

ガイウス ： うぬは、なぜここに居る？

シド ： なッ！？

ガイウス ： 我は大義のためにここに居る！

蛮神ガルーダ ： ……その程度……じゃとッ！？
わたくしは、至高の神じゃぞッ！　おのれッ……たかが人風情がつけあがりおってッ！
……そうか……理解できたぞッ……。その穢らわしい力ッ……星の加護じゃなッ！？
なれば……。

シド ： 何をする気だ！？

アマルジャ族 ： ガァァァァッ！　死中求活ッ……降りたまえよ……。焔神イフリートォォッ！！

コボルド族 ： いたーい　やめーて……。タイタンさーま　たすーけて……。たすーけ……。

アルフィノ ： あれは、アマルジャ族とコボルド族か！？　……まさか！？
そんな、こんなことが……。

シド ： 何をしている！引くぞッ！

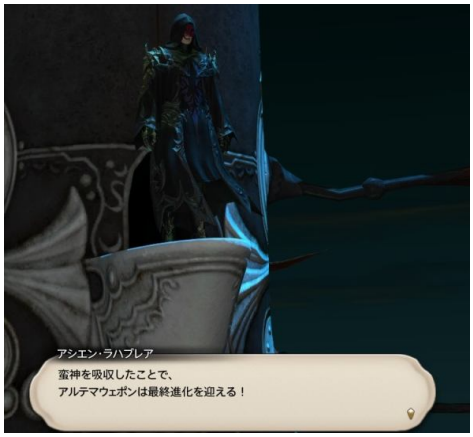
蛮神ガルーダ ： 弱き神ども……汝らを喰ろうて、わたくしは、何者にも負けぬ高みへと至るのじゃッ！

ガイウス ： 「プロト・アルテマ」よ。見せてやれ、お前の力を！
恐れるか、蛮神「ガルーダ」よ！
これこそ、古代アラグ帝国において究極幻想とまで謳われた対蛮神兵器、「アルテマウェポン」なり。

蛮神ガルーダ ： 究極……幻想……じゃとッ！？

ガイウス ： すばらしい力だ！　蛮神、恐るるに足らず！

アシエン・ラハブレア ： 蛮神を吸収したことで、アルテマウェポンは最終進化を迎える！



ガイウス ： 持たざる者は、塵芥（ちりあくた）の如く消え逝くのみよ。
「カルテノー」でお前たちを救った、英雄「光の戦士たち」はもう居ない。
このカを前に、どう動く。エオルゼアを統べる弱き為政者たちよ。
興趣が尽きぬな。

アルフィノ ： な……なんだったのだ、今のは！　何がどうなっている！？
あの黒鎧は何者だ？

シド ： ヤツの名は、ガイウス・ヴァン・バエサル。帝国軍第XIV軍団を率いる軍団長……。つまり、エオルゼア侵攻軍の長だ！

アルフィノ ： そうか、奴が猛将「漆黒の王狼」か……。お祖父様の手記にも、その名があった。

シド ： エオルゼアの支配を諦めたとは思っちゃいなかったが、まさかこんな切り札を……。
俺が記憶を失っている間、帝国軍とは膠着状態だったんじゃなかったのか？

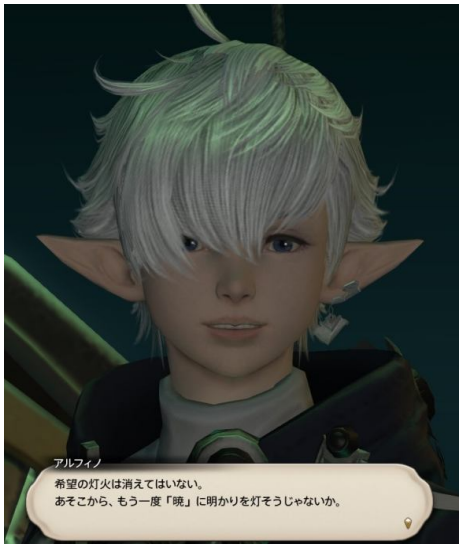
アルフィノ ： そうだ。各地に拠点を築いてからは、目立った動きは把握していない。

シド ： クソッ……。ガイウスめ、何を企んでいる。

アルフィノ ： ともあれ、蛮神「ガルーダ」の脅威は去った。釈然としない幕切れではあったがな……。
ああなっては、なおのこと、蛮神たちは、しばらく鳴りを潜めるだろう。

シド ： 蛮神の次は、やはり帝国ってわけか。

アルフィノ ： ああ……。あの兵器は、エオルゼアの新たな脅威となろう。叩かねばならん。
とはいえ、情報を集めんことには動きようがない。我々にも休息が必要だ。
「暁の血盟」本部へ向かおう。
希望の灯火は消えてはいない。あそこから、もう一度「暁」に明かりを灯そうじゃないか。



シド ： お前を無事に運べてよかった。しかし、蛮神を吸収したあの兵器……ガイウスめ、何を企んでいやがる……。

アルフィノ ： ……ふぅ、ようやく着いたか。いろいろなことが一度に起こって、さすがの私も混乱気味だよ。
しかし、◆◆◆……。蛮神「ガルーダ」を制した君の力はいったい……。
……いや、すまない。今は難しいことを考えるのはよそう。とにかく、蛮神「ガルーダ」は倒したのだ。
蛮神「ガルーダ」が倒されたとなれば、どの蛮族も神降ろし……召喚を控えるだろう。
蛮神が絶対的存在ではないことが証明されたのだからな。
エオルゼアを騒がせていた「蛮神問題」は、一時的にではあるが解決した。本当に、よくやってくれた！